



鷓

夜

前



札四百六十六番  
合本全部四冊

294  
1

逍遙文庫  
文庫6  
718  
1

半掃庵也有翁撰

前篇 後篇  
續篇 拾遺

# 鷓衣

全四冊

尾陽 東壁堂藏

大總  
貸本

大總  
貸本

以安永永れり先とみり川乃ほり  
 世樂精舎よあそひく世者翁の借物の辨  
 とらけりしあまりに酒をたれいりか  
 侍りまよひらり山とまね屋住乃ら子の人  
 あそびにこのまうら出くといけりたれい  
 金糸林桂五うさの赤石よあまね窮をよ  
 かの二ちんさもてきりてまのりあふく  
 ありちりきりてあまね馬相如くまのこま

大總  
貸本



あはれ〜もあまきれくをあつせ  
つ〜るをうつらなはりなり  
ふふれ懸あ〜をふ〜ふ〜ふ〜  
かくう〜〜人よ〜は〜  
い〜

世也

うつら

素直園替

まふ〜あらの帝の時い〜る敷きあ〜り〜  
此地の名を〜あり〜世〜其道の〜  
〜多能〜あ〜ま〜かれよ〜風を生  
〜の外〜一曲〜あ〜  
腰〜まれ〜公界〜つら〜け〜木端  
と〜を〜雲あ〜むさ〜桐の家  
求〜ま〜の夕〜み〜の松〜人  
のふ〜秋風〜ま〜交〜む〜物  
乃片隅〜紙屑〜お〜風〜け〜も  
地〜ま〜れ〜冊〜と〜扇〜



我汝を公と申すは汝我子訓くもつる乃れ妹姿をある  
うゝ一人よかゝるるありあり

袴穿るる日ハやれまはるる園うね

蓼花蒼記

一市との芭蕉子株の柳乃其人の徳子てらされく  
枯ぬ名をとくありしもあるに不仕合ある板本ハある傍正の  
号子呼はくはわふ芥の怒さうううううううううううううう  
名をさく流しつゝ我劍冠乃仕途ふ刃をさるるううううう  
陽家ありこれと蓼花蒼と名つゝ蓼花蒼ハむつゝき  
んハあつれと夕日影家のの氣を申くもつゝの一事  
乃申うりあきもあつれ松茸さよの多きけをも俊成

々乃をぬきせもあつゝ世にまはるるさぬれおうけ  
あれをうつゝこもる名とせりともけ幽栖を何々の郷  
よとありと山に向ひ流しつゝ河あり舟あり月雪花を  
四の時の詠を供し時々ぬ松の夕風竹の夜雨の音まで  
きくさいとらしてらるるみとありきものあつれ塔市と出と流  
つゝと人々杖子鞋をわけてらるるつゝとせしとせしとせしと  
まめいあし出せしとと端の山に杖をさるる門小迷ひとあつれ  
のちあつれのきぬか化されうはの山をこの屋とよへき人  
あつてつゝ桃源と棹さしてつゝあつれつゝ梅のあつ  
番もあつてつゝあつれつゝあつれつゝあつれつゝあつれつゝ  
あつれつゝ茅門とあるへつゝとあり

物さきこの虫はきてあつれ蓼の花

長短解

大ハよく小を子 短ハ長ふまうう 一ノ世ふよのうい  
多うう一ノ君を答一人と詩くつそよといと長演の  
壽ふくくへあるハ龜の尾山の尾を引くみる八十七曲  
と程ひよのちるハあくくあくく一ノ一ノ余ハひく  
あるハ十八さけの申さけきふあくへと独活の丈木の詩  
をのうれを矮雞のそハみ一ノきとあ一ノ赤ルハ返辭ハ  
あうきたのしけ一出る杭かううくはおの益多く  
下手ハ誤議のとまりうひてハおの柳も秘ひり魚あり  
一ノ女の髪こそうきくくあうま一ノさ手あうき人き  
一門ゆも遠さけられ鼻れ下のむひさハハ大さりのお様  
かかうとせく其疾の温鈍のあうきとあうきとされを必

あうきくう一ノ手ううあもまうう一ノおハく一ノ秋の疾のあく  
しううくくハくく難波は写み一ノ手ササの長くうう一ノ  
うきハくく一ノくてあらあしさとと聖人も志の袂の自由  
と物そけり世に式法とこはうにさうあて一ノ子合極もあ  
もあれやそのむつうき境ハ人の制を化あり天地も家屋  
あうき長短ハ自然ふとあて一ノす分の詮議ハる一ノ揚粉本  
ハあゆみに握ると程く一ノ初子さい極ハかこまハたはらと  
下さゆのおあうう天理のまあうと一ノとらむは我友田氏  
一ノ一ノ比かりとちの程れ一ノに煙管を握れりとの程き  
一ノと堂にくくへ一ノ我一の秋西郊ハあうあうありて  
桐葉もあうと長きにまうねりそとらハく一ノとあからと  
久く一ノと遠とあちとあく一ノ舟山よきと吹あう時ハ







とびへーかへにうら金せのま姫とはうりるれを  
柏木のちまつも似せ松本のあうら女ーま男うらうら  
かまきりあきき舞ころのゆめやうあれ女もらよ茶も  
形く明られりそーれつとあもねるーをまうまて  
とうへ白らへのをいそくまて糊米のまあれぬ中しを  
祈るひあかきさーとちきりりるまの比せ<sup>刑</sup>ういとい  
ーあこの二輪のまれば本目細うらの姿やさーまう昔ハ  
所所よういらの名めも呼んうあうーつあのお  
うら時ハ走あのをれころいぬうちあをよまめりまれ  
目ふあやーうりさうても信うま侍まの中まうー  
あき同落の口さー出お子の曲りをよりうまをまあ  
炮録さく仲ま破まうーまけられ茶谷にまうくられ  
あらぬやとさしあうーのうへ面とあうくあもい  
う形くーあまあくおの表さうまあけて買臣ま妻乃  
耻まいひまあひの君れむーをまひつあまはまり  
うらへまをまを解ーまああ。牧庵のあまままれ  
み棚の溜よりあを投げるあを教うまうけ換ーえま  
ままの姿まうりうらうてい今おのつとあ叶りとい  
あうーの怒うまあさうーく石漆の妙薬まも及まて妹春  
の中も引まうし内をまて下られれとも程まみこれの  
おくハ雨かりの奴まうまあまらうー長門の涙うら  
涙形くーあもまらりあーくあうて井戸溜まこら  
うりま草ま津の埋まらう後うこれ表とよ人もうら  
ーふりく形くまらまらまらうらり。壁の中のまも

うき申く比あらんるちのた寺の門書みひうりれあふ  
新屋ふかくちられあうちうりぬ火新よさぬとり、  
ほさあうち茶と茶うーとこーいこふうとと刃心  
ゆやままぬお梅もちうくまきまきた火もらぬと  
ちこ灰をさへおあけられ唐うらーいふらぬと植  
られーかかき月あうさくあはあへきをそれさ  
秋のいろもさうつあま植つちの壘塚よとこれや  
果はさるあまき茶のまこらぬらうきけりあもあ  
園の木の礫とふちうりるると

武陽官邸記

百里の海山きりううくとあふる目出に二年九月

起歩りてあま物のうらるぬまきまきまきまきまき  
まきは都の月とさー入と森をよきまきまきまき  
みはありるほまきまきまきのよまちうり酒度ともく  
つけく常の君ふよ定ちつる二之間ま穴あふと  
乃場とまきまきまきのこねまきまきまきに誰植と  
一やこのつとまきまきのつと花ハ時色とまきまき  
我のまきまきまきまきまきまきまきまきまき  
あまきまきまきまきまきまきまきまきまき  
風鈴ふらふ山のまきまきまきまきまきまきまき  
柘一葉子のたうあまあまきまきまきまきまき  
うきあうとまきまきまきの松風まきまきまきまき  
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまき











はひ多食の豆丸からく〜とある時、隣のやまの耳  
と後をす〜と申とあるよ商人の程朱の説さま  
きり〜と申と申と〜しみと細な役柄と大足よ〜と  
さす〜申中子役と〜れ〜と申〜と〜と〜と〜と〜と  
了士形取の氣取ま〜似〜ん〜く〜へ〜ん〜が〜乃  
程言に頼鼓と威勢を〜と〜と〜又ハ歐陽公立ま  
〜糖と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
大抵う〜ハ〜申中の名子也〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
漆箔のトに〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

ほ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

偶田川涼賦

あ〜と〜のあ〜と〜の〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
川向ま〜角や〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
ま〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
あ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
の格よ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
神〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と







乃あるはまはまにかくらばらりてりてのを幾まの  
此も傳申しに採みして葉根咬れしる事やとへて  
まの風物の方人とふまはるなり

魚りの夢よまのむけさる風

襦袢新替

むさしつりの襦袢をー比あやーの店に求め出せる  
かのあつたまにふまやほーい小襦の甚ゆるりくる  
さんハなると釘の跡の入り居るまの糸完あて  
いしきしけいさあのうまあはるのまのりーまの  
りとさふま独坊まの佛位とや調ーく心借をの  
波の底とやまのいしきとさるまのきりりり  
表ハあまさとさる人まよまのりてさるまのり  
らせと買えー家とあやーのいふまのりーあまの  
世に摺袢ま甚ゆるりと親まのりまの甚ゆるりあつて  
みいつてこまのりまのりーらぬまのりまのり  
まのりまのりまのりまのりまのりまのり  
まのりまのりまのりまのりまのりまのり  
まのりまのりまのりまのりまのりまのり  
まのりまのりまのりまのりまのりまのり

まのりまのりまのりまのり  
まのりまのりまのりまのり  
まのりまのりまのりまのり  
まのりまのりまのりまのり

同菊辞

枯きくく一菊れこのつらき瘦よのつらきま  
あきいこあく向まふくさく菊さうり今や世上  
の富家よかいつれく菊よたさくれ世尺よあ  
ら世花ハ年くまあくさるるま令華と人よま  
似傳とらるものうき菊一の里にうられま  
奥州と時女印まをまあぬ人よあつて世あ  
る菊よ起すれとていれとてまゆとらわ  
りくく一かつ世とくやハ富家あきくまびひ  
勢理を益すくあそはるる菊の齡とくあちん成  
種よまけんする詩の歌とるあいつく瘠人ハ一のま  
このかきるるはハあゆとくやむとてまゆとてま  
こまやまきん菊よとくまあもとてまゆとてま  
あつりまきられ瘠るやうきまよ一まゆとてま  
まゆとてまゆとてまゆとてまゆとてまゆとて  
あつりあまきとてまゆとてまゆとてまゆとて

我菊や尺より山はあつてま

俳序と拈

一級ハ三石れ拈はさるへ

茶の花の比となら茶の葉を形

一汁一葉一つはのま有とてまゆとてまゆとて  
あまのつらへ一まゆとてまゆとてまゆとて  
まゆとてまゆとてまゆとてまゆとてまゆとて

喜も香もせぬや 豆蔵の冬に  
一 河ハ橋のお後をさへく 盃をさへく けさるる  
盃ハ橋をさへく 申さへく

いさめに ぼんぼん 村へ  
斗へ ぼんぼん ありて けさるの ぼんぼん  
くさへ ぼんぼん ありて けさるの ぼんぼん

一 菓子ハ香のありて けさる ぼんぼん けさる  
一 菓子ハ香のありて けさる ぼんぼん けさる

一 煙ハ新町をさへく けさる ぼんぼん けさる  
一 煙ハ新町をさへく けさる ぼんぼん けさる

右へ 菓子ハ香のありて けさる ぼんぼん けさる

おとせ 香のありて けさる ぼんぼん けさる  
さうして 香のありて けさる ぼんぼん けさる  
く 風船に 不信 第一の人と ぼんぼん けさる  
えんえん けさる

おとせ 香のありて けさる ぼんぼん けさる

美人傳

天子 信天翁 ありて 地ハ ありて けさる ぼんぼん けさる  
うし けさるの ありて けさる ぼんぼん けさる  
世中 けさるの ありて けさる ぼんぼん けさる  
と ありて けさるの ありて けさる ぼんぼん けさる  
と ありて けさるの ありて けさる ぼんぼん けさる

とよかりたるを何れの大おほきまにけおまぢりきとく  
おろきの善人とをせりるより世はあまの善人と  
よかりなるをいふのむかしの善人あつてあり  
うしうしと善人もあつてはやくよとむ

病もや樂起てや安まきまは行

爰辨

帝々のおの室毎廿一年のまを病より一富士二聖  
乃不定もこまけりお和親のあつりあて唐人の耳よ  
日本人の病言あつていふれいふれ得失とあつたの  
那那の病はあつり古れいふにいつに病とあつり  
東國よりいふれ病はいつに病とあつり

雲北上人は玉のおの衣とくは病りしは乃き  
ともいふらんあつりお病もかきらぬは  
んまの病も七言満るらけこの病上よあつて  
たせあつりるかろきとくまは告げ佛はいつあつて  
例の世とあつて爰初泡乾のこつことより人ハ  
病もあつれ病も入く世中とあつていふとあつて  
とも爰現のあつりあつは爰と病のこへ入  
く起るといふと病とあつてあつてあつてあつて  
らるる百年の年月よあつてあつてあつてあつて  
形一似病もあつて病一聖人もあつてあつてあつて  
世は誰か定やると鬼病はあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

さらば冷きも熱きもなごむとららばふりてふりて  
あまらうと世にあつこさふ。

うつゝ衣

*... of the ... in the ...*

鼻箴

あつきの浦のくも霞ばかりより年々もアツクも  
いほむさふもよみくやもくくけりうさふや  
いよ名れりくは俳諧よははりあつこま揃花刀  
くもつもあつこさぬうよみなりけりさうもの  
俳諧まうさくしれさうして勝の屋のさうしや  
くさひのちもあつこくも猿田彦の山彦は針代  
一書のももさうまて愛宕の雄の天狗達も  
鼻はあつこれあつこれのあつこれのさう  
あつこつこさくもさうや人の名ゆけり  
遠山乃







ともかくはねをさすくともうたはなをもちうらやま  
へーけぬーこれに名を呼ぶ子を求むまうー  
子猷の竹はえぬ日ありともさうてやあーけぬ  
のよおまあけり一日もうらへあうさうへーけぬ  
簾下にらあうさうさうさうのけ君れ名のたまを傳  
けまうとよらんふらうとまうさねとせの近侍のま  
まは子猷のうらまをさういれともけまのま公権ハ  
しつちうさうしつちうさうの根うらうけのまうむ  
しつちう人のまハけうさうハけ

月とまは花は徳利の四方面

樂志記

雞肋堂にうらうら徳利ありかたうらうらの名を此  
事と呼ぶあけぬのまはうらうらうらうらうらうら  
一つと求むる樂志とまうらうらうらうらうらうら  
男ありたり井筒の女の底まうらうらうらうらうら  
ま安のこありよりかきよふらうらうらうらうら  
らうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら  
これにまのうらうらあうらうら人の娘のまうらうら  
此まうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら  
まうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら  
ま雄の争もなう此まうらうらうらうらうらうら  
月とまは花は狼藉うらうら雞炊のや  
まうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら



下宿のさぬ川おくりとるを先きし風名をせり  
小くきり灯の信とうりしと種よりありのにあらん  
氣をつししと種ぬ者ハ名之後の勘定子のしは  
人より種子のあらぬとてにまひし月おしり  
馬のうきと種鞋より焼酎よりあんまらんひきのきり  
おさまりしと種拍子よとてしとてあらはつりき種  
一休よりとて種紅金の庭の氣をハ蕪鉄つり松  
を種ぬハるしと種峠ハ山みつとてしとて大磯ハ田原ハ  
小石とまきとて種塚ハ名のいしとてありあつとて大乃  
うけ子ハいつみとて種湯屋ハ名性ハひらとて種  
氣とてしと種信の種ハ名をあらつとてしとて種  
乃種種ハあらぬ白の種ハ名をあらつとて種ハ名  
あらぬ種ハあらぬとて種ハ名をあらつとて種ハ名  
あく物と種皿の豆腐ハ名をあらつとて種ハ名をあらつ  
名物のとて種ハ名をあらつとて種ハ名をあらつとて種  
出女と赤まきと種ハ名をあらつとて種ハ名をあらつと  
名ハ名をあらつと種ハ名をあらつと種ハ名をあらつと  
もとて種ハ名をあらつと種ハ名をあらつと種ハ名をあらつ  
甲しと種ハ名をあらつと種ハ名をあらつと種ハ名をあらつ  
あやしのと種ハ名をあらつと種ハ名をあらつと種ハ名をあらつ  
赤表紙のと種ハ名をあらつと種ハ名をあらつと種ハ名をあらつ  
とて種ハ名をあらつと種ハ名をあらつと種ハ名をあらつ  
種ハ名をあらつと種ハ名をあらつと種ハ名をあらつと種ハ名をあらつ  
天をひきと種ハ名をあらつと種ハ名をあらつと種ハ名をあらつ







くふあは誰とてもりのうき世に令限なきはら子  
及たけりり我うり出た子も務まふ才めて女府よりハ  
わりのいまねあゝ世のおきてしをまゝにたゞりまね  
る人のよによこれりり令限なき

訪判髪辞

あつ判髪しと桐の坊とつりともまつに勝勝のほ  
呼ケノ名ときくよりやがて付の推もまねされ  
とも十徳はきりやきわや飯汁はらまきんくらり  
とたりハいつしきり

瀬坂の世とあまき捨て紙をうた

猫自画像

はらわらむの白くはらくしきにおうきくえせよ  
とあるふきにけりしとまきりてふしと辞しても  
おらりきりきりきりきりきりきりきりきりきり  
と居のあれぬまゝあひまむとあつまゝとまゝと  
まゝとらりり我ハ猫なりとせしと大まかハらり  
なりし令圖々書しる秋の戸の馬はらりし秋と春  
はらりきりきりきりきりきりきりきりきりきり  
りきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり  
の人のあつてに出と杖持るもほきりきりきり  
家ハけりし猫ハらりきりきりきりきりきりきり  
のこゝの踊もあつてきりきりきりきりきりきり





淡くもふもれ河を流るる水は別々の思ふ  
うらうとくく一節の情のこころいと女の男と  
やむ男の女とまじりて姿よき妻の涙は  
御座る方はよくけしき老多き翁とくより  
自由の傷あれを井筒のうらみの子鞠り  
く情のれを深内付のしぬきく紅裏の  
まよひの侍らの詞よかぬをさくの娘  
されとまを一句と捨てるを他への  
こころんまをれくかの法師の  
の情の歌のまねよまをるひる中  
よあり一娘さやいふと母と  
の向いの女房と海舟の  
の軒ときくはきくはきくは  
註のついでにきくはきくは  
と西よきまをくまをるの  
はあり一巻はありと根  
とふく入のこころまをる  
者におもさるまをるの  
はあり一巻はありと根  
はあり一巻はありと根  
今生川の流るる水は  
求く今と流るる水は









て花のま—い月の夕アツ—もあはれらるる  
も—さ—さ—の—さ—さ—あ—さ—さ—さ—さ—さ—さ—さ—  
の解をとりしれ秋の—さ—さ—さ—さ—さ—さ—さ—  
下戸の—さ—さ—さ—さ—さ—さ—さ—さ—さ—さ—  
川—さ—さ—さ—さ—さ—さ—さ—さ—さ—さ—  
柳の—さ—さ—さ—さ—さ—さ—さ—さ—さ—さ—  
何—さ—さ—さ—さ—さ—さ—さ—さ—さ—さ—  
月—さ—さ—さ—さ—さ—さ—さ—さ—さ—さ—

花あはれは花の—さ—さ—さ—さ—さ—さ—

お念ふは

とすれは—さ—さ—さ—さ—さ—さ—さ—  
の—さ—さ—さ—さ—さ—さ—さ—  
弟の—さ—さ—さ—さ—さ—さ—さ—  
る昔—さ—さ—さ—さ—さ—さ—さ—  
す—さ—さ—さ—さ—さ—さ—さ—  
さ—さ—さ—さ—さ—さ—さ—  
も—さ—さ—さ—さ—さ—さ—さ—  
の—さ—さ—さ—さ—さ—さ—さ—  
は—さ—さ—さ—さ—さ—さ—さ—  
秋の—さ—さ—さ—さ—さ—さ—さ—  
花の—さ—さ—さ—さ—さ—さ—さ—  
ひ—さ—さ—さ—さ—さ—さ—さ—  
も—さ—さ—さ—さ—さ—さ—さ—







右の文章享保の初より寛保に  
まゝ半掃菴著述の遺稿也

張藩 六林校

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the characters '張藩' and '六林校'.*

魁野 在後

也者るハ風雅乃侯君子ありと云ハ莫海人の  
文と許されつ祿ヲ教とくらハ才あり  
ハ女子ハ東都の四寸先生あり 三寸ハ女子  
ハの才名を莫ハ女子久ハ 能ハ女子ハ  
アハ女子ハ 才ハ女子ハ 生ハ女子ハ 四寸ハ 不斷  
あり 才ハ女子ハ 四寸ハ 不斷 あり 才ハ女子ハ  
あり 才ハ女子ハ 四寸ハ 不斷 あり 才ハ女子ハ  
あり 才ハ女子ハ 四寸ハ 不斷 あり 才ハ女子ハ  
あり 才ハ女子ハ 四寸ハ 不斷 あり 才ハ女子ハ  
あり 才ハ女子ハ 四寸ハ 不斷 あり 才ハ女子ハ

あつたはとくもこふは流るの音ある人あつた外  
やいあつた前付の田舎へいふはとくもこふは  
文雅ある男あつた建とくもこふは押り出乃  
川出とくもこふは文雅の底へいふはとくもこふは  
中へいふはとくもこふはとくもこふはとくもこふは  
あつたはとくもこふはとくもこふはとくもこふは  
近の女あつたはとくもこふはとくもこふはとくもこふは  
清子あつたはとくもこふはとくもこふはとくもこふは  
余下あつたはとくもこふはとくもこふはとくもこふは  
乃高はとくもこふはとくもこふはとくもこふはとくもこふは

さよふあつたはとくもこふはとくもこふはとくもこふは  
あつたはとくもこふはとくもこふはとくもこふはとくもこふは  
此一茶とくもこふはとくもこふはとくもこふはとくもこふは  
さよふあつたはとくもこふはとくもこふはとくもこふは

天明五年乙巳所記の下句

菰花岡 六林識

煙草説

おろの膝れはすまきとて腰に茶瓶も持てて秋の  
森のの淋しきとて棚の餌ももれとてゆく只この  
烟草れ友とあそぶとて吟詩酒の三つもまざるへり  
燵のまえ杭をさすゝゝの宰予、まきの目さすゝ  
の煙草首近しゝる小侍従、待宵あゝむ達摩九年  
の聖たむくんと炭団のまきを悟り西行ハ柳陰リ  
まぎ火打の光と樂むされと出女のまきをハウられ  
乃ねにかかれと口紅元と吸くガハ公つゝい  
んを船の短きせるハ舳されハ葡萄く明乃

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the characters "煙草説" and other illegible handwritten notes.*

月と訝まゝ大漁く吸く掛るよりよむのそれ  
やうあゝむをくあき座敷子張の煙子益と  
あゝむ教子引くくくく路次れ体合よ吸口包  
くくくくく風流あれとさくく辞義合めくも  
九へー只あゝくくの松陰よ如くく継手くするなま  
せは茶室の壇のさくく蛇くく草火くく  
きく出くく一瓢千金れくくく時とくくやま  
雲をあくくくくく先の後場くくく煙打の  
きくくく人首くくくくく吸くくくくく煙  
母・飯の情よりくくくくくくくくく煙子の煙  
もむくくくくくくくくくくくくくくくく

富貴ある者あり茶ハ屋迄ある者ありくくく  
つら君子の夢よあゝくくく用射ハ一巻にきと起  
あゝくく時ハ神れくくくく神話の傍ありくく  
ソレート戸と妖物ハ世にくくくくト戸ハ控あゝ  
今中稀あるくくくくくくくくく吸くく  
も吸くくくくく入の風流思よまらんよまゆるれ物き  
くくくくくくくくくくくくくくくくく  
山の初まきくくくくくくくくくくくく  
きくくくくく通くくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくく  
は後さくくくくくくくくくくく



さすりにさし出さるるおのゝまゝさすりし思ふの家の名も  
橘をよみしにさすりのやうにさすりて若かりし襖一き  
さすりてこゝろにまねりていひさくま  
さすりてねんづきやん

田の口

湯の山やさきにとまゝ深ゆき

幕の湯にゆつて秋の栞の形

山の上の葦原をさすりて岳寺と名のみこゝろに  
回祿ありたる後いささうにりさすりてさすりて傷さ  
ゆかり子つゝの堂をれ男あつ法界とさすりてさすり

さすりてや刺さぬあゝぬさすり

さすりての心さすりてさすりてさすりてさすりて

つぎ

笛よせぬ湯下駈りもさすりてさすりて

つぎさすりてさすりてさすりてさすりてさすりて  
さすりてさすりて

さすりてさすりてさすりてさすりて

さすりてさすりてさすりてさすりて

さすりてさすりてさすりてさすりて

さすりてさすりてさすりてさすりて

さすりてさすりてさすりてさすりて

我名つみ人の名もさすりてさすりてさすりて  
さすりてさすりてさすりてさすりて

あまこといづる魚よりよきとさきよ人もよき牛よ  
こくに羽らねといきりーま樹といづるよき借あり  
下もある家残ちとこして淋ーさちまきくうつきとも  
あれりさる思教も二四うさり今いとくうる日ハ雨ト  
あまき

湯まぢらー秋の果や秋の雨

こころのよもほのさい玉もあやとまつけける比ハ乙亥の  
年にあんまらる。

聖老之唐之像賛

陰浪の舟とよは河においむーくわは茶をば  
へーと二つの口にあいさむハ聖老之唐のあーありえれ

酒は待茶に待てて月二枚

とらるハとの友紫原甲れ某、かきうハ、あまらるあう

清奥州株人辞

朱印の事由を説く株人雅伯、  
謝る辞也

世ハハサ戸垣のるらき汗をかきくーさよふあまらる  
まつゆーとあまらるを遠き清奥のんもさるあ  
りさるー一句を添くーの他の巻あるよりーさやあ  
硯を掃くあうああやーまのつ又ま摺れあらん我  
あまらる人さるあまらるのほせー風もあまらる  
そのまよ名さる騒あ島唐主の何ーとやうのあ  
さい桂たりのある序、我名わーのさるよりさ俳門











しつゝさくしつゝれされとあふ一生のあつゝふちれと  
け府下りしてふ何一徳のつゝとあふとさして其さ  
まされさるゝさるゝは一句のさあかんたさの詠一  
物のよれつゝのふ隈のねとさるゝ丹生の歎き六浦  
のあみちと今にらるゝさるゝとあふとさるゝとさ  
すれつゝの月とあふとさるゝとあふとさるゝとさ  
と昔とさるゝとあふとさるゝとあふとさるゝとさ  
へきさるゝとあふとさるゝとあふとさるゝとさ  
堂と名つとさるゝとあふとさるゝとあふとさるゝと  
雲上の屋とあふとさるゝとあふとさるゝとさ  
さしてあふとさるゝとあふとさるゝとさ  
とさるゝとあふとさるゝとあふとさるゝとさ  
とさるゝとあふとさるゝとあふとさるゝとさ

積のよに磨つともくさるゝとさるゝと

若像賛

るゝ方地のつゝさるゝけつ 吟は 枯せれさるゝとさ  
詠のよの月のさるゝとさるゝとさるゝとさるゝと

音曲説

今 柘郎詠とさるゝとさるゝとさるゝとさるゝと  
借るあふとさるゝとさるゝとさるゝとさるゝと  
幸あふとさるゝとさるゝとさるゝとさるゝと  
とさるゝとさるゝとさるゝとさるゝとさるゝと









懐旧覽古の懐さうく誼のぬらうつらう子あまふ、  
まきぬり老とく人のきりうきく懐居らり所  
うきこりりいむむいそそこの友のいつまはらぬ  
へれとてみのな結まあぬの一面乃良色を抱く面  
の四月の扱友務の席に搔あぐきは人いへ半家承を  
あやうやあうらん我ひそくに老隠の務古をさる  
とらうりされそこの記は置も母され社又よりつらぬ  
い申まうき糸筋あがり撥面に之りをり乃月  
さし出く桐れ一葉れ散るれと秋涼よふよふま  
これよさういむ句いつとこよまふ

膝變てく良隠のまつきや秋の書

新雨亭記

市中をまきて遠くへ杖路を寝とけく沼と睡く  
まど旁きぬ市中まき遠くへ家底に枕をまきく  
まを求く年静ありこまの地を求りく聊篠を容る  
乃懐居さうあむよ一の鬼ハコもむらん我世又  
あはは〜〜あま〜〜は花やあまの岡あ〜〜  
ま〜〜ま〜〜れてと老の春さしるさやと人あれす  
あつるまうりらんの心在のちのりと流して四壁こ風  
さうてまこと経つうふ糸と拂わこま汲へき心の井ま  
けま〜〜井ま〜〜つこ〜〜さうの〜〜あれあ〜〜りハ  
タうあれ少家うらあま〜〜枕ま寝れ睡と告けお〜〜ま  
とらうのたれ声〜〜い〜〜と〜〜ま〜〜り〜〜ま〜〜あ〜〜ん

川と出て東北の方を流るべく十歩の杖と曳けて指  
万尋の山横おれ眼下十町の田つちあや村落畫圖  
乃中子入る南ハさるくの山林さく雪法の浦風しとく  
とや勢田沼も石のこりてまはなまあめ日も多うり  
や、流るるれはゆるり細りくあつ声虫のききよそ  
よりハあまきを地さるハおきの里も道りれをあら  
年らね年うりつぼの枝ハまきぬもるもりまきぬ  
あつらふのくしき世れはまはら二もさあつれはあ  
こんくに片まきぬりうされと名をきくあまきぬと  
まうの穂氏、毒雨もももり守りうり黄川のきられさ  
追りす只これ定君ハ似れとあやや多病の老母  
はあまきぬはあまきぬはあまきぬはあまきぬはあまきぬ  
はあまきぬはあまきぬはあまきぬはあまきぬはあまきぬ  
あれと世をうらむと人ハあまきぬも

百魚譜

人の武士ねハ槍の斗魚ハ鯛とよみ並りる世の人乃口  
まきぬとよのくさぬくあるおまきぬハあれともい魚と  
かて調味の完上とよまびま答あるへうとよまうけく基  
子君る男うりくさ外子似るへくもまきぬとよまらうり  
まらうりまきぬとよまらうりまらうりまらうりまらうり  
りる他人もあきぬとよまらうりまらうりまらうりまらうり  
同じくけとよまらうりまらうりまらうりまらうりまらうり  
といふハ食味をまらうりまらうりまらうりまらうりまらうり

えんと字あひくも人いひく一愚あるをさてもいふことあり  
しり

松門流よのちんとすりあきうとあけなうくも大聖  
のゆきよもけをさかすせあるるこれと世の名声の綱  
並そびとすれそりある幸ふあつ味ひ羨うつと  
いへも綱の料の思あるふあへくも一 乾物  
あ物にちれ給清汁によう一すすくも一蒲葎  
こ用ひくく後ちも籍子も調せは品子一男あつ也子と  
まるいも能を耻といひくんと申すあまれとさつるみや昔  
平家よ悪七兵未景清と名なき今氏るまは流子さ  
威をへく胡比奈赤文よ肩をあつくとすさつるん記  
縁の上ありてハ柳の外の外ハ柳の柳ありてハ世に  
二所まふもあつるあるつりちれ侍ありてハ世に

名れこもくしきとある人評しるものありてハ  
しと七系とある一

和江の右春我胡もあつてすし張氏ハとそと秋風  
さのく仕途を辞し平家ハとそ船中よけく官路  
進正進退いつれさうやむへし

柳ハ進江子洞庭の名をくくくも鯉ハ似く位階お  
すり名子ハ和名もいふとれと給ハまは堂を説くや  
あれり

柳ハ平家公のはちてさやされ梅咲しつと世に上  
轉ハ初秋に祝うれく空世の蓮のそにやうな後生  
そあの契しこのあ

鯉ハ芥子鮓の風味上戸ハ千金母からしむもさうい  
と謙余も此鮓のまじ性を羨めたいといふはそれなり  
口おし鯉鮓とさういふは此鮓のやういふさういふ  
その物ともいふとさういふ花の名をさく世にちり  
ちり

鯉鮓の唐々紅く子細らうさまつる一切さういふ  
しくまじつ料をさういふさういふ汁にあつた  
鯉鮓さういふ二の汁の大おきて搦手をさういふ  
かゝ文字の即座よりさういふ紫の上ハ鱗とさういふ  
のい中文字の即座よりさういふ鮓をさういふ

鯉ハ越後より名ありしく其國のまじも似てさういふ入  
り

鯉鮓といふものもさういふはさういふ

狭おゆふるさういふのいハ鯉とさういふこれハ有性乃  
非性とさういふこれハ非性のまじとあれり石とさういふ  
世にさういふ鯉とさういふ調法さういふ

牡丹ハ花の一掃さういふさういふ梅桜ハ子ばる葩と東  
洋とさういふはそれハ勝さういふともさういふ  
魚鮓の論ハ及ます白魚といふものハ世にわけて  
とやさういふハの鯉鮓の大魚ハこれを今ハ梅桜  
の鮓とさういふさういふに國俗れとさういふさういふ  
魚ともさういふ魚ともいふさういふさういふさういふ  
さういふさういふさういふさういふさういふさういふ  
さういふさういふさういふさういふさういふさういふ



そられされとく人さきうかともいひくしぬ人と  
きり別ともいひ

鶴とよみの味いこころにそくれされとも嵐山のや  
ま玉と襟ユラウとく多きうあまのりまもくく巖  
田島のこやいとあるとも此門と字りく天下の界  
を防くを功解解も及よく

されと人ハ多きに四季と多ちく魚と四時の部  
越形一俳人兼く魚と品むとすハカハらく味の  
考發と捨りあがりきれとあやみハ平目のたよ  
とこまりく今に世界ありとてともかひ似れと  
このゆりしきさう茶とわらうによみく茶の糸乃  
さうしきとあのはりは只惜しと人のいひくはあまき  
あうあうとく

葉山子辞

わさとせーおこのいふ葉山そく山田の畔り  
ひりうとくくーあむむれとるいふ若れ後穂ひま  
くう例の口さうくくさひくハ巻由ハ古岸ハ柳のそ  
とさうさん義家ハ吟弦と雲乃うくまひくをね政ハ鶴  
を射りとの外氏ね名士乃弓茶工功あるう船とのまを  
みおしく世に名とすハりあんとやあや一の竹は縄を  
て射りやあやぬらうの敵とらり我業とあさむんと  
さうや葉山子とくはとくいひくぬらうなさぬ矢

うく射る時ハ中らねばうもさつれさうととよみかゝる  
分のかきさるるやその奥州の吟位も矢を放さしして  
徳はあつりそり麟ハ角をさくこれとも肉ありて物を  
やうにむしるを其の乃言射も亦を刀に刃の類とのれて  
しそりしとくハあせらせつれあわく物とやあり  
そとあひく後々の功をかきむとさるハ悪徳のまね下り  
しとやうの彫りしをささゆとや九方甲にぬらうとく  
翼垂天の中をたさしとくしとく徳のうよ油らう  
うくこのかきさるるあはれとく我をみつては教  
しとくみりね笑えとさるさハ若あともさよよまされ  
とりの大彫れをさし羽らうハ若あれ例乃大嘘に  
并彫れしとくしとく世に彫りしとくは若あれ例乃大嘘に  
実とゆきしとく世に彫りしとくは若あれ例乃大嘘に  
こつとくしとくしとくは若あれ例乃大嘘に  
矢にさしとくしとくは若あれ例乃大嘘に  
求やうは若あれ例乃大嘘に  
これとくしとくしとくは若あれ例乃大嘘に  
あつとくしとくしとくは若あれ例乃大嘘に  
徳をこまぬれとくしとくは若あれ例乃大嘘に  
乃神く求く海芽うさつとくしとくは若あれ例乃大嘘に  
徳が刃にあきとくしとくは若あれ例乃大嘘に  
棹さしとくしとくは若あれ例乃大嘘に  
あつとくしとくしとくは若あれ例乃大嘘に  
とくしとくしとくは若あれ例乃大嘘に

拾時とあゝぬ葉山子のら矢く形

と静くいふ心とすや葉山子静くいとあゝぬ海  
こころに似て又さふ心とすらにらむとまきと静くや  
葉山子とすやまふれはらふまはあゝぬとけあふ  
まはとすくいとさる

さふ葉山子ぬ葉山子のら矢く形

あゝぬ葉山子ぬ葉山子のら矢く形

糸瓜辞

むくつけさかへんといふこととて伏格れやとす  
花はまきしてタウられんあまきとまはらつとすけいのへつ  
料やまはつらさそとてわらうとす持とてやうとす  
俳諧原乃のらんいふくここの垣根まは言せとるらん  
そのまはのそあふつと持とあまきとまはらつとすけいのへつ  
坊まみみえらとて隣の人とすうとす

葉山のりとまきけと糸瓜く形

静又いふとす葉山の葉山子のら矢く形  
あゝぬ葉山子ぬ葉山子のら矢く形  
楊柳葉山のありふとあゝぬ葉山子ぬ葉山子のら矢く形  
まきとあゝぬ葉山子ぬ葉山子のら矢く形  
まは医者の子あゝぬ葉山子ぬ葉山子のら矢く形  
まはあゝぬ葉山子ぬ葉山子のら矢く形











この續を布ハせ有るの實保の事能なり  
家々磨の事ハ其の比きくの遺稿をあり  
抄出也

末僚 小林

# 大日本國郡全圖

彩色摺  
箱入

全二冊

此六十余州の全圖ハ一ハ經國の大業小志ある人を一ハ地の理を知  
るの或ハ遊歴の客廻國順拜の人々勝蹟古跡を探り神社佛閣を  
尋るふ必用の書小く比年東路箱の撰ふく其の志海内小公小せん  
を計り累年の工夫を以て終ハ大成せしむり其各國の郡縣村落山  
河不以て中々盡く著色を以て分ち一覽を小易くし其今明ある事  
恰も暗中小燭を得たる小掌中を照をてて詳ふく乾坤を知  
事眼下り歴然とて一奇書ありかの仙家縮地の  
術も是あら及ぎるべきを戸を出せし天下を去るとし古  
語も嘗て此冊子の為小くある也

## 書肆

尾州名古屋本町通七丁目 永樂屋東四郎  
江戸日本橋通本銀町二丁目 同 出店

早稲田大学図書館

011688991015